

## ベルマーク便りコンクール2022 入賞校を訪ねて①

参加団体が、ベルマークのことを保護者や子どもたち、地域に広く伝えるベルマーク便り。そのお便りを募るのが「ベルマーク便りコンクール」です。37回目の開催となった今回は、123校から応募がありました。どのお便りも、読み手に伝わるようにと工夫していることがよく分かりました。

審査の結果、優秀賞11校、佳作7校、特別賞4校が決まりました。今回、そのうちの9校に財団職員が訪問し、お話を聞くことができました。今月号と来月号の2回に分けてご紹介します。入賞校は、ベルマーク新聞2022年11月号や財団のホームページに掲載しています。

## 保護者の気になる情報をブログで

### 佳作・大田区立山王小

東京都大田区の区立山王小学校（長町正弘校長、児童806人）の「PTA ブログ」が佳作を受賞しました。保護者が気になっている話題を取り上げて、高頻度で投稿し、読者を惹きつけています。

ブログ更新を担当しているのはPTA文化部長の前田智子さん。9月には、おなじく部長の吉田比呂子さんと財団見学にも来てくれました。

更新するときに前田さんが心がけているのは「情報を盛り込むこと」。文化部長に話を聞いてみると、ベルマークの切り方や整理方法など、皆さん疑問に思っていることがあり、情報発信の必要性を感じたといいます。ブログの良さは「情報量が多ければ読み飛ばして、分からなくなったら戻って見直せること」だと話してくれました。

山王小PTAには8つの部があります。中でも、文化

部は部員を募集するとすぐに定員になってしまうほど大人気。コツコツとした作業が得意だったり、備品購入を通じて子どもの役に立っている実感を得やすかったりすることが人気の理由です。

今年度は、初めての取り組みとして、子どもたちにアンケートを実施しました。買ってほしい備品への投票をお願いすると、早速たくさんの反応がありました。結果をもとに学校と相談して品物を決める予定です。

「全てが手探り」「何がベストか模索中」とそれぞれ話す吉田さんと前田さんは、来年度も部長を継続することが決まっています。保護者の「なぜ?」「どうして?」に答えるブログの運営は続きます。「子どもたちのためにできることを」という共通認識はブログを通してますます広まっていきたいです。



④整理棚を設置し、仕分けに協力してもらおう ⑤昨年10月にはベルマーク預金でパドミントンラケットを購入 ⑥PTA文化部の皆さん。後列左は長町校長。キリンビバレッジの「生茶 ほうじ煎茶」を持って

## 子どもの心をつかむ掲示物を

### 優秀賞・逗子市立沼間小

「自分たちが楽しくやらないと。大変だと感じると、活動そのものの衰退にもつながる」

神奈川県逗子市の市立沼間小学校（小島恵美子校長、児童557人）の「ベルマーク新聞」が優秀賞に選ばれました。作成しているのは「ベルマークポスト隊」として活動する有志の保護者5人。様々な仕事のあるPTA組織の厚生委員会とは別にすることで、より気軽に活動に関わることができ、負担感の軽減にもつながっています。

楽しみながらボランティア活動をする大切さを語ってくれたのが、厚生委員とベルマークポスト隊を兼任している小磯良子さん。同じように兼任の浅田啓子さん、河野公二さん、「ポスト隊」専任の渡辺朋子さん、坂本由実さんと協力し、次々と新しい試みにチャレンジしています。小磯さんが厚生委員になったのは3年前。お買いも

の額の10%が支援に回ることを初めて知り、もっと周知したいと考えました。まず他校の活動例を真似して、仕分けに使う入れ物や、壁ポケットを作りました。次第に、アイデアが次々と浮かんだメンバーは、お便りや掲示物にもより力を入れ、児童にアンケートを実施、七夕の願い事募集イベントを企画するなどし、保護者だけでなく子どもたちとの関わりも生まれました。特に注目を浴びたのは、「ベルマークポスト」。収集ポストが1カ月ごとに各教室をリレーしていくイベントです。

小磯さんのねらいは「『ベルマーク、楽しそうだな』と感じてもらい、誰もが関わりやすい環境を整えること」です。同小では現在、PTA組織の改編を計画していますが、「気軽に参加できる体制にし、これからも盛り上げていきたい」と話してくれました。



④アドベントカレンダーをめくると、ベルマークについて学ぶことができる ⑤「ポスト隊」が作成した掲示板 ⑥左から河野公二さん、小磯良子さん、小島恵美子校長、浅田啓子さん、渡辺朋子さん

## 地域の活性化につなげたい

### 特別賞・尾道市重井公民館

「多様な主体が連携するのが今の時代。地域の活性化につながるのならウェルカムです」

こう話すのは、広島県にある尾道市重井公民館の小森健治館長。特別賞を受賞した公民館です。

重井公民館は、長く住民の学びの場としての役割を担ってきました。ところが、コロナ禍によって状況は一変。閉館状態になり、手が空いてしまったそうです。

そこで思いついたのがベルマーク運動への参加。町のみんなで使える「ワンタッチテント」を買うため、13万点を目標に活動がスタートしました。

初めに取っかかったのは「公民館だより」を使った周知活動です。日頃から関わりのあった近隣の小学校、中学校にも収集BOXを置いてもらえることになりました。館内には大きな掲示物も貼り、協力を呼びかけています。

しばらく経った2022年6月。公民館を訪ねてきたのはベルマーク協賛会社、キリンビバレッジの金田秀男

さんと、同社と自動販売機事業で業務提携をしているヤクルト山陽の岡田昌治さんと松井卓磨さんです。担当エリアを回っていたところ、「公民館がベルマーク活動をしている」という話を聞きつけ、興味を持ったといいます。

実は金田さん、ベルマークに着目し、新しいことに取り組みたいとちょうど考えていたところでした。ベルマークを改めて勉強し、一緒に仕事をしているヤクルトの商品の多くがテトラパック社製だと発見しました。

「ベルマーク収集に協力し、公民館に寄贈すれば、社会貢献ができるかもしれない」。金田さんはヤクルト山陽に共有し、早速、地元の企業に収集BOXの設置をお願いして回りました。「重井公民館のため」と伝えると、活動の趣旨にすぐ賛同を得られたそうです。

「別々の団体だからといってがんじがらめになっていたら、活動はひらけなかった」という館長の言葉からは、公民館の持つ新たな可能性を強く感じました。



④前列左から、重井公民館の村上真菜江さん、小森健治館長、柏原千代美さん。後列左から、キリンビバレッジの金田秀男さん、ヤクルト山陽の松井卓磨さん、岡田昌治さん ⑤虫かごが回収BOXに変身！ ⑥特に力を入れているのは、テトラパックの開き方の説明